

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、
アイデンティティの確立との関連の検討

A Study about the Evaluation of the Second Rebellious
Period in Female College Students :
From the Relation between Parent-Child Relationships
and Establishment of Identity

石 川 満佐育

ISHIKAWA Masayasu

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、 アイデンティティの確立との関連の検討

The relationship of the second rebellious period, parent-child relationships, and
establishment of identity in female college students

石川 満佐育

ISHIKAWA Masayasu

要旨：本研究では、女子学生312名を対象に、第二反抗期の経験の有無とその影響評価に焦点をあて、第二反抗期の生起要因として「中学生・高校生時の親との関わり」との関連、現在の自己形成の指標として「アイデンティティの確立」、「自律性欲求」との関連を検討することを目的とした。まず、第二反抗期の経験の有無によって群分けを行い、その割合を検討した結果、第二反抗期を経験しなかったと回答したものは312名のうち80名(25.6%)であった。次に、第二反抗期の有無と各指標との関連をt検定によって検討した結果から、第二反抗期有群、無群の特徴について考察を行った。さらに、第二反抗期の有無とその影響評価の回答から群分けを行い、各指標との関連を一元配置の分散分析によって検討を行った結果から、4群の特徴について考察を行った。最後に総合的考察において本研究の課題と今後の展望について述べた。

キーワード：第二反抗期, 女子学生, 第二反抗期の有無に対する影響評価, 親子関係, アイデンティティの確立, 自立性欲求

【問題と目的】

人は発達の過程の中で、特に思春期において、親や教師などの周囲の大人や権威に対して拒否的、反抗的な態度を示す時期があり、第二反抗期とよばれている(繁多, 1999)。白井(1997)は、第二反抗期における諸理論を概観し、従来の理論では、思春期における親子のコンフリクトは、第二次性徴の発現や自我の目覚めを契機に生じ、自立に伴う必然的な過程である、と説明している。つまり、第二反抗期は必然であり誰しもが経験するものと捉えられてきたといえる。しかし、近年では第二反抗期がないと報告する学生が一定数いることが報告されている(溝上, 2011; 白井, 1997)。第二反抗期を従来の理論で捉えると、第二反抗期の経験がないということは、子どもが自立のステップを踏んでいないことの表れである(深谷, 2004)、あるいは、子どもの自我が十分に発達していないことを示す(住田, 1995)など、否定的な評価がなされる。この点について白井(1997)は、従来の理論の限界を指摘し、“親子のコンフリクトは必ずしも発達の必然ではなく、それが無いといけないということではないと言えよう。親子のコンフリクトがある場合には、そのあり方が問題であろうし、反対に、親子のコンフリクトがない場合にも、青年の自立のあり方が問われなければならない。”(pp.21)と述べている。また、溝上(2011)は、“発

達的には、第二反抗期があったかどうかということよりも、親や教師といった児童期までの愛着対象との関係を、新たな愛着対象(親友や親密な他者)との関係をもとに再構築する作業を行ったかどうかのほうが重要である”(pp.440)と述べている。白井(1997)や溝上(2011)の指摘をふまえると、平石(2011)がいうように、思春期の反抗期について、その有無だけに注目し、良し悪しについて論じることに問題があるといえることができる。

第二反抗期については、関心が高い現象のわりには正確な調査資料がないことが指摘されている(細田, 2008)。また、青年心理学のなかで第二反抗期それ自体の研究があまりみられないことも指摘されている(溝上, 2011)。第二反抗期がなくなったという言説はよく耳にするが、第二反抗期の有無に関して実際にどのような割合なのか実証的な研究から検討することが必要であると考えられる。

第二反抗期は、当事者と親によってその感じ方や記憶へのとどめ方が異なっており、誰の視点から第二反抗期を捉えていくかが、大きなポイントとされる(溝上, 2011)。ここでは当事者の視点から述べることにする。当事者の視点から第二反抗期を捉えた先行研究をみると、第二反抗期の時期をある程度経験した大学生、短大生を対象に、回顧的な検討が行われている。青野(1997)では、女子大学生を対象に「あなたは両親に対して、反抗的な気持ちを強く感じた時期がありましたか?」という問いで第二反抗期の有無を尋ねた結果、あったと答えたのは155名中の149名(96.1%)にのぼり、なかったと答えたのは6名(3.9%)であったと報告されている。この報告から多くの学生は第二反抗期を経験していることがうかがえるが、青野(1997)の問いは、反抗的な気持ちを強く感じたかを尋ねており、感情面に焦点が当てられている。しかし、白井(1997)による反抗期がなかったとされる学生の報告では、「親に対する不満があったが、反抗したくても反抗できなかった気がする」、という記載がある。反抗的な気持ちをもっていてもそれが表出できない場合があることを考えると、青野(1997)の問いは、第二反抗期の捉え方としては不十分であると考えられる。繁多(1999)では、第二反抗期について反抗的な態度を示す時期としており、感情面だけでなく、反抗的な態度を示すこと、つまり行動面に焦点をあてる必要があると考えられる。従って、本研究では、「思春期段階のもので、親に対して反抗的な態度をとる時期」と説明したうえで、大学生、短大生に回顧的に振り返ってもらう方法を用いて、第二反抗期の経験の有無を検討することとする。なお、反抗の対象になるのは、親や教師などの周囲の大人や権威などが挙げられるが、本研究では、先行研究同様、対象を親に限定した反抗を扱うこととする。

ところで、先述したように専門家、研究者においては、第二反抗期の有無のみに焦点をあてその良し悪しについて論じることに問題点が指摘されているが、第二反抗期を経験した学生からしてみると、第二反抗期の有無のみに焦点がおかれる傾向があるように思われる。詳細な検討が行われているわけではないので推測の域を脱しないが、事実、講義等で第二反抗期の話題にふれると、その後の感想の中で「私は第二反抗期がなかったのですが、問題があるのでしょうか?」と質問してくる学生も少なくない。第二反抗期という言葉は、専門家の間だけではなく、

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

一般の多くの人々が知っている専門用語となっている(平石, 2011)。また, “保護者に対する「反抗」というものが, 人間の発達段階の1つとしてどの子どもにも訪れるものであり, その過程で自立心が身についていく, という前提を, 多くの人々が共有しているように思われる”(pp.51)という指摘もある(千田, 2011)。多くの人にとって第二反抗期がないことは, その理由こそ明確ではないが, 従来の反抗期がないことの否定的な評価と結びついている可能性がある。

こうした現状をみると, 第二反抗期の経験の有無を学生はどのように捉えているか, という疑問が生じる。大学生に対して第二反抗期に関する質問紙調査, 面接調査を行った野田・葛西(2009)によれば, 第二反抗期を経験することにより, 親との距離が接近したり対等な関係へと変化したりすると回答する者がいる一方で, 親子関係が悪化したと回答する者がいることを報告している。さらに, 被調査者の回答から, 第二反抗期で獲得される主なものは, 自我の発達や親からの自立が挙げられるとした一方で, 第二反抗期は重要でないと感じている被調査者がおり, 必ずしも第二反抗期を経験すれば青年の課題を獲得できるわけではないと報告している。野田・葛西(2009)の報告から, 第二反抗期があったとしても, それを現在の自分にとってプラスの影響があると捉えている可能性もあれば, マイナスの影響があると捉えている可能性もあり, 第二反抗期の経験の有無を学生がどのように捉えているかは, 個人差があると考えられる。従って, 本研究では, 第二反抗期の有無のみに焦点をあてることの問題点をふまえ, 第二反抗期の有無が現在の自分にとってどのような影響を与えていると捉えているか, すなわち, その影響評価という視点を加えて, 第二反抗期のあり方について検討することとする。

本研究では第二反抗期の経験の有無とその影響評価の観点から検討を行う際の指標として, 第二反抗期の生起に関する指標, 現在の自己形成に関する指標の2つを取りあげる。

第二反抗期が生起する要因について, 両親との絆・依存が強いものほど両親に対して自己主張でき, 反抗的でない(渡邊, 1994)など, 親子関係が第二反抗期に影響を与えるという報告が多くなされている。白井(2003)は, 学生のレポートから親に反抗しなかった理由を整理し, ①親の言うことに納得している, ②親と友達のような対等な関係を持っている, ③親を頼っている, ④親が自分を拘束したりせず干渉したりせず, 自分の自由にさせてくれる, ⑤親が怖くて反抗することができなかった, ⑥「親に嫌われたくない」「良い子でしよう」として反抗できなかった, ⑦他の兄弟が反抗したために自分が反抗する出番がなかったり, それを見て反抗するのをやめたりした, ⑧とくに自分に強い意見や欲求がなく, 親と対立することがない, の8つにまとめている。ここで挙げられた8つの理由は, 総じて, 過去に親とどのように関わってきたかが述べられているといえる。

白井(2003)による8つの理由は, 学生のレポートから得られており, 学生の生の声が反映しているという点で有益な知見であるが, 実証的に検討が行われているわけではない。そこで, 本研究では, 上記の白井(2003)のあげた8つの理由を参考に「中学生・高校生時の親との関わり」として項目作成を行い, 第二反抗期の有無に影響を与える要因として量的な検討を行う。また, 伊藤(2013)は, “反抗期がないことが心配である場合と, そうでない場合が考えられる”(pp.94)

と述べ、心配ない場合の例として、早い段階から親が子どもの人格を認め「対等な大人」として扱ってきた場合などを挙げている。また、平石 (2011) は、親の不適切な養育態度による不信感や怒り、愛情飢餓などの未解決な課題が思春期に持ちこされた結果生じている反抗は、ときに心理的な援助が必要な深刻な問題となることもあると述べている。第二反抗期の有無のみで捉えた場合、白井 (2003) の親に反抗しない理由から作成される親との関わりの項目において、有群と無群では差がみられることが予想される。しかし、伊藤 (2013)、平石 (2011) の指摘のように反抗期の有無の背景には違いがある可能性がある。従って、第二反抗期の有無だけでなく、その影響評価の観点から検討することで、有無のみでは明らかにならないその背景を検討することが可能になると考えられる。

次に、現在の自己形成に関する指標であるが、本研究では、アイデンティティの確立と自律性欲求を取りあげる。

Erikson (1959) は、青年期の発達課題として、アイデンティティの形成 (確立) を提唱した。アイデンティティは「自己の斉一性」「時間的な連続性と一貫性」「帰属性」の感覚が統合されたものであることから「自分らしさ」の感覚ともいわれている。さらに、アイデンティティの確立とは、「自分とは何者か」「自分には何ができるのか」という「同一性」の問題に、自分で悩んだ末に答えを導きだし、その答えに自分で納得し、それに従って行動できるようになることとされる。先行研究から、アイデンティティが形成されるきっかけは、両親、友人、恋人といった他者との関係性の中にあり、このような関係性は、アイデンティティを形成するための不可欠な“土壌”として存在しているといわれている (藤田・岡本, 2009)。他者との関係性という点で、親との関係は特に重要であり、多くの先行研究において、青年期の親子関係がアイデンティティの確立に影響を及ぼすことが見出され、さらに青年の自己を形成する概念と関連し重要な役割を担っていることが明らかにされている (大久保, 2009)。発達上、子どもの反抗は、親子の関係性の問題を切り離して考えることができない (平石, 2011) ことからすると、親子の関係性に変化を生じさせる第二反抗期の有無が、現在のアイデンティティの確立とどのように関連するかについて検討することは意義があると考えられる。

次に自律性欲求について述べる。黒崎 (1995) は、自己形成の過程に不可欠と考えられる側面として、自己形成意識と自律性を挙げている。その1つである自律性とは、日常の些末な問題から人生の進路に関わる重要な問題まで、自分の判断により自分の責任で選択することを意味する。先行研究ではこの自律性について、自律性欲求という観点から検討が行われている。自律性欲求とは、行動を自ら生起させたい、行動を自分で決定したいという欲求である (安藤, 2003)。学生にとって進路選択は大きな発達上の重要な課題であるが、近年、進路選択に対して自律的に活動できない学生がおり、その支援をどのように行うかは教育上の重要な問題になっている。安藤 (2007) は、保育系短期大学生 216 名に対して自律性欲求が就職動機づけに及ぼす影響について検討し、自己決定欲求を強く持つ場合、就職という状況においても自律的に取り組むことができていることを明らかにしている。進路選択という重要な課題を迎える学

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

生にとって、自律性欲求を高めることは重要であり、自己形成の指標として自律的欲求を取りあげることが意義があると考えられる。第二反抗期と自律性の関係について新井・佐藤（2000）は、“子どもは、親や年長者への反抗や自己決定経験を通して、「自分の行動や生活、人生や将来を自分自身で決定していきたい」、また「決定していけると思うし、その方がうまくいくと思う」、さらに「それらが親や他の人から決められるのは嫌だし、自分に関わることは自分で決定すべきことだと思う」といったような内容の自己決定に関する意識も作り上げていくと思われる”（pp.151）、と述べている。新井・佐藤（2000）の指摘から、親に対しての反抗が、自分の行動は自分で決めたいという自己決定の意識、つまり自律性欲求を作り挙げる、ということがうかがえるが、その指摘は示唆的であり、十分な検討が行われていない。従って、第二反抗期の有無が現在の自律的欲求とどのような関連があるかを探索的に検討することとする。

本研究では、上記に述べたアイデンティティの確立、自律欲求との関連を、第二反抗期の経験の有無との関連だけではなく、その影響評価の観点も加えて検討する。青年心理学のなかで第二反抗期それ自体の研究はあまり見られないため、第二反抗期の有無とその影響評価の観点から直接的に、アイデンティティの確立、自律欲求の関連を検討した研究はみられない。従って、第二反抗期の有無の影響評価も含めた本研究の検討は探索的な試みといえる。

以上のことから、本研究では、第二反抗期の経験の有無とその影響評価に焦点をあて、第二反抗期の生起要因として「中学生・高校生時の親との関わり」との関連、現在の自己形成の指標として「アイデンティティの確立」、「自律性欲求」との関連を検討することを目的とする。具体的には、まず、被調査者を第二反抗期の経験の有無に関する項目から2つの群に分け、各指標との関連を検討する。次に、第二反抗期の経験の有無とその影響評価に関する項目への回答から、被調査者を4群に分け、各群との関連を検討する。

【方法】

1. 調査時期

調査時期は、2011年11月～2月であった。

2. 調査対象

福島県、群馬県、鹿児島県、埼玉県の大学生、短期大学生346名（男子18名、女子328名；18～27歳）であった。

3. 手続き

各大学等の講義内に一斉配布し実施した。所用時間は10分～20分程度であった。

倫理的配慮として、調査実施前に対象の学生に対して、①無記名で実施され、個人の回答が所属組織に報告されることは無いこと、②結果は所属組織の成績等に反映されることは無いこと、③コンピューター処理され、研究終了後一定期間経過後に粉碎・破棄されること、④回答の処理からデータ保管と廃棄まで記入済み回答用紙は厳重に管理されること、⑤調査の結果は、研究のみに利用され学会発表や学術論文として公表されることがあるが、個人の回答がそのま

ま公表されることはないこと、⑥答えたくない質問がある場合は、その質問に答えなくてもかまわないこと、⑦回答を途中で辞めなくなった場合、辞めることは可能で、そのことによる不利益は一切生じないこと、の旨を質問紙の表紙に記載し、説明を行った。

4. 調査内容

(1) 第二反抗期の経験の有無、影響評価に関する項目

第二反抗期の経験の有無、ならびにその影響評価について、8つの問いを設定した。

第二反抗期の有無について、「①これまでの生活を振り返って、自分には反抗期があったと思いますか?」という1項目の問いに対して、4件法(「全くなかった」、「ほとんどなかった」、「ときどきあった」、「かなりあった」)で回答を求めた。その際、反抗期の定義として「思春期段階のもので、親に対して反動的な態度をとる時期」と記載した。反抗期の有無を問う①の項目の4つの選択肢のうち「ときどきあった」、「かなりあった」を選択した被調査者に対し、以下の②～⑤の問いに回答してもらった。また、①の項目の4つの選択肢のうち「全くなかった」、「ほとんどなかった」を選択した被調査者に対し、以下の⑥～⑧の問いに回答してもらった。

反抗期があったと回答した被調査者に対して、「②自分の反抗期はいつごろあったと思いますか?」という1項目の問いに対して、5つの選択肢(複数回答可)(「小学校中学年(3,4年)」、「小学校高学年(5,6年)」、「中学生」、「高校生」、「高校卒業時～現在」)について回答を求めた。次に「③どのような態度・行動があったために、反抗期が「かなりあった、ときどきあった」の選択肢を選択しましたか?反抗期の態度・行動として浮かんだ内容を自由にお書きください。」という問いに対して、自由に記述してもらった。次に、「④反抗期があったことに対して、今現在あなたはどのように考えていますか?」という1項目について、「反抗期があったことは、今の自分にとって、」と前文で示し、4件法(「よくない影響を与えていると思う」、「どちらかというところ、よくない影響を与えると思う」、「どちらかというところ、よい影響を与えていると思う」、「よい影響を与えていると思う」)で回答を求めた。次に、「⑤上記④の問いに対して、具体的にどのようなところに影響があると思いますか?思い当たることがありましたら自由にお書きください。」という問いに対して、自由に記述してもらった。

反抗期がなかったと回答した被調査者に対して、「⑥どのような態度・行動がなかったために、反抗期が「全くなかった、ほとんどなかった」の選択肢を選択しましたか?反抗期の態度・行動として浮かんだ内容を自由にお書きください。」という問いに対して、自由に記述してもらった。「⑦反抗期がほとんどなかった、全くなかったことに対して、今現在あなたはどのように考えていますか?」という1項目について、「反抗期がなかったことは、今の自分にとって、」と前文で示し、4件法(「よくない影響を与えていると思う」、「どちらかというところ、よくない影響を与えると思う」、「どちらかというところ、よい影響を与えていると思う」、「よい影響を与えていると思う」)で回答を求めた。さらに、「⑧上記⑦の問いに対して、具体的にどのようなところに影響があると思いますか?思い当たることがありましたら自由にお書きください。」の問いに対して、自由に記述してもらった。なお、③、⑤、⑥、⑧の自由記述の結果については詳細な

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

検討ができなかったため、結果の一部のみを考察で用いることとする。

(2) 中学生・高校生時の親との関わりに関する項目

白井（2003）による親に反抗しない理由を参考に7つの項目を作成し、「かなりあてはまる（6点）」、「ややあてはまる（5点）」、「どちらかというにあてはまる（4点）」、「どちらかというにあてはまらない（3点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「全くあてはまらない（1点）」の6件法で回答を求めた。なお、白井（2003）による理由の8つうち「⑦他の兄弟が反抗したために自分が反抗する出番がなかったり、それを見て反抗するのをやめたりした」について、本研究では兄弟の有無については尋ねていないため、項目の作成は行わないこととした。

(3) アイデンティティの確立尺度

下山（1992）によって作成されたアイデンティティ尺度のうち「アイデンティティの確立」尺度10項目を用い、4件法で回答を求めた。

(4) 自律性欲求尺度

安藤（2003）によって作成された自律性欲求尺度13項目を用い、5件法で回答を求めた。本尺度は、「自己決定性」尺度（7項目）、「独立」尺度（6項目）の2つの下位尺度から構成されている。

【結果】

1. 分析対象者、尺度構成

本研究では男性の被調査者が少なかったため、男性の被調査者を除外するとともに、回答に欠損がみられる被調査者を除外した結果、分析対象者は女子学生312名となった（18～24歳； $M=18.95$, $SD=1.81$ ）。

中学生・高校生時の親との関わり（以下：中高時の親との関わり）に関する項目については、尺度化を目的にしているわけではないため、それぞれの項目ごとに分析することとした。また、アイデンティティの確立尺度、自律性尺度については、先行研究に従ってそれぞれ得点化を行った。それぞれの α 係数を算出したところ、「アイデンティティの確立」尺度 $\alpha=.87$ 、「自己決定性」尺度 $\alpha=.70$ 、「独立」尺度 $\alpha=.53$ であった。「独立」尺度の α 係数の値が低かったため、分析には用いないこととした。

2. 第二反抗期の経験の有無による群分け

第二反抗期の有無への回答をもとに群分けを行った。反抗期があると回答としたもの（①の問いに対して「ときどきあった」、「かなりあった」を選択したもの）を反抗期有群とし、反抗期がないと回答としたもの（①の問いに対して「ほとんどなかった」、「全くなかった」を選択したもの）を反抗期無群とした。その結果、反抗期有群は232名（74.4%；「ときどきあった」147名、「かなりあった」85名）、反抗期無群は80名（25.6%；「ほとんどなかった」72名、「全くなかった」8名）であった。また、反抗期有群のうち、第二反抗期があった時期の有無をTable 1に示す。その結果、中学生で経験したものが最も多く、次いで高校生が多かった。

次に、第二反抗期の経験の有無による違いを検討するために、第二反抗期の有無を独立変数、

中高時の親との関わり, 自己形成の指標の得点を従属変数として, *t*検定を行った (Table 2)。その結果, 中高時の親との関わりの 4 項目において有意な差がみられた。

Table 1 第二反抗期有群における時期の有無

時期	経験有	経験無	計
小学校中学年 (3, 4年生)	14 (6.0)	218 (94.0)	232 (100.0)
小学校高学年 (5, 6年生)	37 (15.9)	195 (84.1)	232 (100.0)
中学生	174 (75.0)	58 (25.0)	232 (100.0)
高校生	117 (50.4)	115 (49.6)	232 (100.0)
高校卒業時～現在	45 (19.4)	187 (80.6)	232 (100.0)

値は人数, () 内の値は%

Table 2 第二反抗期の有無における各得点の比較

No	項目	群	N	M	SD	t 値	比較
No.1	親の言うことに納得することが多かった。	有群	232	3.45	(1.20)	4.88 ***	有群 < 無群
		無群	80	4.20	(1.12)		
No.2	親とは, 友達のような対等な関係でいることが多かった。	有群	232	3.08	(1.38)	2.76 **	有群 < 無群
		無群	80	3.65	(1.67)		
No.3	親を頼りにしてきたことが多かった。	有群	232	4.53	(1.35)	0.48 <i>n.s.</i>	
		無群	80	4.61	(1.22)		
No.4	親は, 自分を拘束したり干渉したりせず, 自分の自由にさせてくれることが多かった。	有群	232	3.44	(1.56)	3.27 **	有群 < 無群
		無群	80	4.09	(1.43)		
No.5	親が怖いと思うようなことが多かった。	有群	232	2.87	(1.39)	0.72 <i>n.s.</i>	
		無群	80	3.00	(1.56)		
No.6	「親に嫌われたくない」「よい子でいよう」と思う事が多かった。	有群	232	2.50	(1.38)	1.40 <i>n.s.</i>	
		無群	80	2.79	(1.62)		
No.7	とくに自分に強い欲求や意見がなく, 親と対立することはなかった。	有群	232	2.59	(1.28)	6.28 ***	有群 < 無群
		無群	80	3.65	(1.39)		
	アイデンティティの確立	有群	232	25.88	(5.57)	1.54 <i>n.s.</i>	
		無群	80	26.95	(4.69)		
	自己決定性	有群	232	26.34	(3.69)	1.20 <i>n.s.</i>	
		無群	80	26.93	(3.90)		

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *n.s.*: 有意差なし

3. 第二反抗期の有無, 影響評価のプラス, マイナスによる群分け

反抗期有群のうち, 良くない影響を与えていると回答したもの (④の問いに対して (「よくない影響を与えていると思う」, 「どちらかという, よくない影響を与えると思う」を選択したもの) を反抗期有影响評価マイナス群 (55名; 17.6%) とし, 良い影響を与えていると回答したもの (④の問いに対して「どちらかという, よい影響を与えていると思う」, 「よい影響を与えていると思う」を選択したもの) を反抗期有影响評価プラス群 (177名; 56.7%) とした。また, 反抗期無群のうち, 良くない影響を与えていると回答したもの (⑦の問いに対して「よ

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

くない影響を与えていると思う」、「どちらかという、よくない影響を与えると思う」を選択したもの)を反抗期無影響評価マイナス群(31名;9.9%)とし、良い影響を与えていると回答したもの(⑦の問いに対して「どちらかという、よい影響を与えていると思う」、「よい影響を与えていると思う」を選択したもの)を反抗期無影響評価プラス群(49名;15.7%)とした。

4. 第二反抗期の有無, 影響評価による各群における各変数との関連の検討

(1) 中学生・高校生時の親との関わりについての検討

第二反抗期の有無とその影響評価による各群の特徴を明らかにするために、各群を独立変数、中高時の親との関わりの各項目を従属変数として一元配置の分散分析を行った(Table 3)。その結果、4項目の得点において有意な差がみられた。有意な差がみられた項目について、Bonferroni法による多重比較を行った結果($p<.05$)、群間において有意な差がみられた。

Table 3 各群における「中高時の親との関わり」の各項目の平均, 標準偏差, ならびに分散分析の結果

No	群	N	M	(SD)	F値	多重比較 ($p<.05$)
No.1	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	3.33	(1.22)	8.03 ***	① < ④ ② < ④
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	3.50	(1.20)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.97	(1.28)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	4.31	(1.00)		
	全体	312	3.64	(1.22)		
No.2	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	2.96	(1.48)	6.06 **	① < ④ ② < ④ ③ < ④
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	3.12	(1.36)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.03	(1.64)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	4.02	(1.56)		
	全体	312	3.22	(1.48)		
No.3	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	4.40	(1.56)	1.16 <i>n.s.</i>	
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	4.58	(1.28)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	4.29	(1.24)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	4.78	(1.16)		
	全体	312	4.55	(1.31)		
No.4	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	3.18	(1.58)	6.82 ***	① < ④ ② < ④ ③ < ④
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	3.54	(1.56)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.42	(1.43)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	4.45	(1.28)		
	全体	312	3.61	(1.55)		
No.5	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	2.84	(1.48)	2.00 <i>n.s.</i>	
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	2.86	(1.36)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.48	(1.57)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	2.76	(1.48)		
	全体	312	2.90	(1.43)		
No.6	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	2.62	(1.51)	2.18 <i>n.s.</i>	
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	2.45	(1.34)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.16	(1.79)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	2.61	(1.47)		
	全体	312	2.58	(1.45)		
No.7	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	2.53	(1.15)	13.19 ***	① < ④ ② < ④
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	2.62	(1.34)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	3.26	(1.34)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	3.84	(1.34)		
	全体	312	2.86	(1.38)		

***: $p<.001$, **: $p<.01$, *n.s.*: 有意差なし

(2) 自己形成の指標についての検討

各群を独立変数にして、自己形成の指標である各尺度を従属変数として一元配置の分散分析を行った (Table 4)。その結果、「アイデンティティの確立」の得点において有意な差がみられた。「アイデンティティの確立」の得点について、Bonferroni法による多重比較を行った結果 ($p < .05$)、群間において有意な差がみられた。

Table 4 各群における自己形成指標の各得点の平均、標準偏差、ならびに分散分析の結果

基準尺度	群	N	M	(SD)	F値	多重比較 ($p < .05$)
アイデンティティ の確立	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	24.22	(5.72)	4.00 **	① < ④ ③ < ④
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	26.42	(5.43)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	25.68	(5.39)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	27.65	(4.07)		
	全体	312	26.15	(5.37)		
自己決定性	① 反抗期有影響評価マイナス群	55	25.71	(3.78)	1.06 <i>n.s.</i>	
	② 反抗期有影響評価プラス群	177	26.58	(3.66)		
	③ 反抗期無影響評価マイナス群	31	26.90	(3.96)		
	④ 反抗期無影響評価プラス群	49	26.80	(3.88)		
	全体	312	26.49	(3.75)		

**: $p < .01$, *n.s.*:有意差なし

【考察】

1. 第二反抗期の経験の有無の人数比について

第二反抗期の経験の有無については、反抗期有群が 232 名 (74.4%)、反抗期無群が 80 名 (25.6%) であった。本研究の反抗期無群の割合は、青野 (1997) の結果よりも高い割合となった。青野 (1997) は第二反抗期を感情面から捉えているが、本研究では「親に対して反抗的な態度をとる時期」と記載した上で、「自分には反抗期があったと思いますか?」と尋ねており、行動面から捉えている。この捉え方の違いが、割合の違いに影響したと考えられる。白井 (1997) による反抗したくてもできない学生の報告をふまえると、本研究の反抗期無群の割合が高くなるのは妥当といえる。従って、回顧的に第二反抗期の有無の回答を求めた本研究の結果から、4 人に 1 人は第二反抗期を経験しなかったことが明らかになり、第二反抗期を経験していない学生は一定数いることが示されたといえる。

また、反抗期有群のうち、第二反抗期があった時期について検討を行った結果、中学生で経験したものが最も多く、次いで高校生が多かった。この結果は、先の女子大生を対象に調査を行った青野 (1997) の結果とほぼ一致する。青野 (1997) では、約 7 割の女子大生が、中学校時代ないし高校時代に親に対する反抗の強い時期が存在したことを報告している。本研究の結果と青野 (1997) をふまえると、第二反抗期を経験した場合には、中学生期で最も多くみられることから、従来の指摘のように、第二反抗期と呼ぶにふさわしい特定の期間が青年前期に存在すると考えられる。

2. 第二反抗期の経験の有無からみた各指標における比較

第二反抗期の有無による中高時の親との関わり、自己形成の指標の得点の違いをみるために、

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

検討を行った。その結果、中高時の親との関わりの4項目において、有意な差がみられた。この結果をまとめると、反抗期有群は反抗期無群と比べて、自分の意見や欲求をもってはいるが、親との関係は対等とはいえず、自由が制限されたり、両親の言うことに納得できないことも多かったために、過去において反抗的な態度をとっていたと解釈できる。

中高時の親との関わりの項目は、白井（2003）による親に反抗しない理由を参考に作成している。従って、全ての項目で無群と有群では有意な差があることが予想されたが、本研究で差がみられたのは4項目であった。ここでは差がみられなかった3項目について考察していく。「No.4 親を頼りにしていることが多かった。」の結果では、全体的に「あてはまる」方の回答が多く、第二反抗期であろうとなかろうと親に対しては依存的な傾向を持っているといえる。この結果は、後述する影響評価を含めた検討の結果でも同様であった。この結果について、女性は母親との依存・絆が比較的強いまま維持されることを示した渡邊（1997）や、親、特に母親との距離の近さを保ちながら自立のプロセスをたどるという水本・山根（2010）の指摘をふまえると、女子学生は一般的に親に対しての依存的な傾向が高く、それは第二反抗期の有無とは関係せず、ある程度一貫して維持されることが示唆されたといえる。また、「No.5 親を怖いと思うようなことが多かった。」「No.6「親に嫌われたくない」「よい子でいよう」と思うことが多かった」の結果をみると、有群無群とも得点は3.00点以下となっている。選択肢から考えるとこの項目には全体的に「あてはまらない」方の回答が多かったとわかる。No.5やNo.6の項目は両親に対して自己抑制をもたらす内容と考えられる。本研究の結果から、第二反抗期の有無にかかわらず、全体的に中学生期、高校生期に自己抑制をもたらすような親子の関わりは多くはないことが示唆された。しかし、白井（1997）の報告にもあるように個別事例的にみえていくと自己抑制をもたらすような親子の関わりをもつ学生が存在する。第二反抗期の有無のみの検討では明確にはされなかったため、第二反抗期の有無の影響評価を含めた検討のところでさらに考察することとする。

以上、親に反抗しなかった7つの理由をもとにした中高時の親との関わりと第二反抗期の経験の有無との関連を検討した結果、3つの項目で有意な差がみられなかった。白井（2003）による親に反抗しない理由は有益な知見ではあるが、そのうちの3つの理由については統計的に明確な理由とはいえないことが示唆された。明確な理由とならなかった要因として、女性は全体的に親との依存性が強いことや中学生は全体的に自己抑制の傾向が少ないといった異なる要因が影響している可能性が示唆された。

また、アイデンティティの確立、自己決定性においても第二反抗期の経験の有無のみでは有意な差は得られなかった。このことから第二反抗期の有無とアイデンティティの確立、自己決定性の高さには関連がみられないといえる。従って、アイデンティティの確立、自己決定性の観点からみると、第二反抗期の有無のみでは、従来の理論による否定的な評価には結びつかないことが示された。さらに、思春期の反抗について、「その有無だけに注目し、良し悪しについて論じる」ことに問題があるという平石（2011）の主張を支持する結果が得られたといえる。

3. 4 群における中学生・高校生時の親との関わりでの得点についての比較

第二反抗期の経験の有無と影響評価のプラス群マイナス群による各群の特徴を明らかにするために、各群を独立変数、中高時の親との関わりでの各項目を従属変数として一元配置の分散分析を行った結果、4つの項目の得点において有意な差がみられた。

ここではまず、「No.2 親とは友達のような対等な関係でいることが多かった。」「No.4 親は、自分を拘束したり干渉したりせず、自分の自由にさせてくれることが多かった。」の比較から反抗期無影響評価プラス群、反抗期無影響評価マイナス群の特徴について述べる。No.2 にしても No.4 にしても、反抗期無影響評価プラス群の得点が他の群に比べて有意に高い。この結果から、先述した第二反抗期の有無のみからの検討では明らかにならなかった親子関係の様相がみえてくる。つまり、反抗期無群のうち、そのことをプラスに評価しているものは、親子関係が対等で、親は本人の自立を促すような関わりをしていたといえる。伊藤 (2013) は、“反抗期があるかないかではなく、親子の関係がタテの関係がヨコの (対等な関係) に結びかえられているかどうかが『鍵』になるといえそうである”，(pp.948) と述べている。伊藤 (2013) の指摘をふまえると、反抗期無影響評価プラス群のものは、早期から親と対等な関係を築くことができおり、その結果、過去において両親に反抗することもなく、現在においても反抗期がなかったことをプラスに捉えていることが示唆された。一方、反抗期無影響評価マイナス群は、親子関係が対等ではなく、自由にさせてくれることも多くはなかったようである。また、有意ではなかったものの、「No.5 親を怖いと思うようなことが多かった。」「No.6 「親に嫌われたくない」「よい子でいよう』」と思うことが多かった』で最も高い得点が示されており、選択肢のうち「あてはまる」の方に回答していたものが他の群よりも多いことがわかる。このことから、過去に反抗期がなかったのは、親が怖い、よい子でいようなど、何らかの理由で自分を抑制するようになってしまい、それが現在にも影響しているためマイナスの評価となっている可能性が示唆された。実際に、反抗期無影響評価マイナス群の自由記述 ((1) の⑧への回答) では、半数以上が「今でも親に言いたいことが言えない」「我慢することが多い」「家族と腹を割って話せない」などの記述が得られている。心理学の領域では、過剰適応という概念があり、その特徴は「真面目、頑張り屋、頼まれると嫌といえない、相手の期待に添う、周囲に気を使う、いい子」と捉えられている (浅井, 2012)。本研究における反抗期無影響評価マイナス群は、過剰適応の傾向をもった学生といえる可能性が示唆される。また、過剰適応は個人の状態や精神的健康にネガティブな影響を与えるという結果も多くみられる (浅井, 2012)。これらの指摘から、本研究の結果は、問題と目的で述べた伊藤 (2013) の反抗期がないことが心配である場合と、そうでない場合が考えられるという指摘を裏付けるもので、特に反抗期無影響評価マイナス群にあたる学生は、支援の対象になりえる存在である可能性が示唆されたといえよう。

4. 4 群における自己形成の指標の得点についての比較

第二反抗期の有無と影響評価のプラス群マイナス群による各群の特徴を明らかにするために、各群を独立変数、自己形成の指標である各尺度を従属変数として一元配置の分散分析を行った

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

結果、「アイデンティティの確立」の得点において有意な差がみられた。

多重比較の結果から、特に反抗期無影響評価プラス群の得点が高いことが示された。田中（1993）は、女子短大生を対象に、親子関係の在り方と自我の発達との関連を検討した結果、母が受容的であればあるほど自我確立の程度が高くなることを示した。さらに、親子関係を受容性と統制性の程度の組み合わせで8つのタイプに類型化し、それらと自我の発達との関連から、母-娘関係が受容的自律型のタイプで「自我確立」の程度が高く、拒否的自律型と拒否的統制型のタイプで低くなることを示している。田中（1993）と本研究の中高期の親との関わりの結果を踏まえると、反抗期無影響評価プラス群は、反抗による両親との葛藤や衝突が少なく、両親と対等な関係の中で、自立を促すような受容的な関わりをもつことが多かったために、アイデンティティの確立の得点が高くなったと考えられる。

また、反抗期有影響評価マイナス群の得点は、反抗期有影響評価プラス群よりも有意に低いという結果が得られた。この結果から両群の違いについて述べる。第二反抗期は親子関係に危機的な状況をもたらすものであり、その関係性は悪い方向に向かう可能性が高い。それは、中高時の親との関わりにおける反抗期無群との比較からも読み取れる。しかし、アイデンティティの確立という観点からみると、その影響をどのように評価するかによって得点に違いが生じた。違いが生じた理由として、親に対する見方の変化が影響している可能性があげられる。落合・佐藤（1996）の心理的離乳の概念に関する実証的研究では、この過程において中学生・高校生にあたる青年期前期・中期には、理想と異なる親を批判し葛藤が生じ、親から分離しようとする欲求が高まるが、大学生にあたる青年期後期になると親を客観視できるようになり、親子関係を再構成し対等に関わることができるようになるという発達モデルを提唱している。また、杉村（1998）は、アイデンティティ形成について、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の間の視点の食い違いを相互調整によって解決する作業としている。落合・佐藤（1996）、杉村（1998）の指摘を踏まえると、親子関係からみたアイデンティティの形成には、親子関係の再構成による相互調整が必要になるといえそうである。このことから、反抗期有影響評価プラス群は、過去において第二反抗期を経験したとしても、大学生、短大生になって親子関係を再構成することができた結果、過去の反抗をプラスに評価にでき、アイデンティティ形成につながった可能性が示唆された。一方、反抗期有影響評価マイナス群は、過去の反抗によって悪化した親子関係を再構成できなかった結果、反抗をマイナスに評価したため、アイデンティティ形成の得点が低くなった可能性が示唆された。この示唆を明確にするためには、各群の学生が現在の親子関係をどのように捉えているかを検討する必要がある、今後の課題といえる。

もうひとつの自己形成の指標として用いた自己決定性については、各群において有意な差はみられなかった。先に述べた反抗期の有無のみによる検討からも有意な差が得られていない。このことから、第二反抗期の有無、その影響評価は自己決定性と関連しない可能性が示唆された。しかし、大学生が認知した親の養育態度としての自律性援助の高さは、現在の自己決定感と正

の関連をもつことが指摘されている(桜井, 2003)。本研究の結果から, 第二反抗期がなかったとする学生は, 親子関係が対応で自由の制限が少ない関わりが多かったとしており, こうような関わりは自律的支援が高いといえる。従って過去の親との関わりもふまえると, 第二反抗期の有無とその影響評価が自己決定性に関連する可能性も否定できない。この点は, 先行研究もほとんどないため, 今後の課題としたい。

【総合的考察】

本研究では, 女子学生312名を対象に, 第二反抗期の経験の有無とその影響評価に焦点をあて, 第二反抗期の生起要因として「中学生・高校生時の親との関わり」との関連, 現在の自己形成の指標として「アイデンティティの確立」, 「自律性欲求」との関連を検討することを目的とした。まず, 第二反抗期の経験の有無の群分けを行い, その割合を検討した結果, 第二反抗期を経験しなかったと回答したものは4人に1人という結果が得られ, 経験したものの多くは, 中学生期に最も経験していたことが明らかになった。次に, 第二反抗期の有無と各指標との関連をt検定によって検討した結果, 有意な差がみられ, その結果をもとに各群について考察を行った。次に, 第二反抗期の有無とその影響評価の回答から群分けを行い, 各指標との関連を一元配置の分散分析によって検討を行った結果から, 4群の特徴について考察を行った。

本研究から得られた知見は主に以下の3つである。1つ目は, 実証的な検討から第二反抗期の有無の割合が示されたことである。近年第二反抗期がない学生が一定数いることが報告されているが, 本研究の結果から, 第二反抗期を経験しなかったものは4人に1人という結果が得られ, ある程度具体的な割合を示すことができた。2つ目は, 第二反抗期に関する諸説からの指摘を支持する結果が得られたことである。先行研究から第二反抗期の有無からその善し悪しを述べることには問題があることが指摘されていたが, 本研究における第二反抗期の経験の有無と自己形成指標との関連の検討結果から, その指摘を支持する結果が得られた。3つ目に, 第二反抗期の経験の有無だけでなくその影響評価の観点を加えて検討を行うことで, 第二反抗期の有無のみの検討だけでは明らかにならない各群の特徴が示されたことである。第二反抗期があったとしても, その影響評価がプラスかマイナスかの違いによって, アイデンティティの確立の程度が異なることが示された。また, 第二反抗期がなかったものでも, その影響評価の違いによって, 親子関係に違いがあることやアイデンティティの確立の程度も異なることが示された。

次に3つの点から本研究の課題について述べる。まず本研究の分析対象者が女子学生のみだった点が課題といえる。本研究では, 男子学生の被調査者が少なかったため, 女子学生のみを対象にした。青年期の親子関係とアイデンティティ形成過程との関係に性差があることが明らかにされている(藤田・岡本, 2009)。また, 考察でも述べたが, 男性と女性とでは, 親への依存性が異なることが示されている。このことから, 第二反抗期の経験の有無や, その生起要因, 自己形成の指標との関連において性差がみられる可能性もあるため, 今後は男子学生を対象に検討を行う必要がある。その際, 親子関係の関係性についても詳細に検討を行う必要がある。

女子学生における第二反抗期の経験と親子関係、アイデンティティの確立との関連の検討

親子関係と一口に言っても、その関係性は父・母・息子・娘の組み合わせにより異なり、親子関係について検討するにあたっては、対象が父なのか母なのか、子は息子なのか娘なのかを区別する必要がある（水本・山根，2011）。本研究では、反抗の対象となる親については両親としたため、母親、父親に対する反抗がどうであったかについては検討されていない。従って、男性も含めた検討を行うとともにその関係性を考慮した検討が必要である。

2つ目は、因果関係の課題である。本研究では、女子学生を対象に、回顧的な方法を用いて第二反抗期の経験の有無とその影響評価の観点から検討を行った。本研究は、一時点による横断研究によって行われているため、因果関係については明確にされておらず、関連を検討するにとどまっている。特に自己形成の指標との関連については、縦断研究によって詳細な検討を行うことが必要であろう。また、本研究の結果から、中高期の親との関わりが、第二反抗期の影響評価に影響を与えている可能性も十分に考えられる。大学生、短大生を対象に回顧的な方法を用いて行った本研究の限界といえるが、詳細な因果関係を検討するためにも、縦断的な方法を用いた検討を行う必要があると考えられる。

3つ目は、第二反抗期の捉え方の課題である。本研究では、第二反抗期の定義について「思春期段階のもので、親に対して反抗的な態度をとる時期」とし、被調査者に提示したうえで回答を求めた。しかし、第二反抗期という用語は一般的によく知られている用語ではあるが、反抗期のイメージや概念は、人によって大きく異なっている可能性が指摘されている（細田，2008）。中学生を対象にした調査から、親への反抗の形態を分類した小沢（1999）によると、反抗期の行動として①親に対して口答えをする、②親にイライラして物にあたる、③親に対して暴力をふるう、④親を無視する、⑤親を避けて部屋にこもる、⑥親と会いたくなくて外出するまたは家出する、などが挙げられている。本研究では自由記述において、第二反抗期の行動としてどのような内容があったかを尋ねているが、その内容を詳細に分析するには至らなかったため、第二反抗期の具体的な行動を被調査者が理解して、第二反抗期の経験の有無を尋ねる項目に回答したかは定かではない。第二反抗期を被調査者がどのように捉えているかを明確にしたうえで検討を行う必要があるかもしれない。また、本研究では第二反抗期の経験の有無を4つの選択肢から回答させ、それを恣意的に有群、無群の2群に分ける方法をとっているため、反抗の程度については考慮されていない。その点で本研究の結果も第二反抗期の側面を捉えたものに違いなく方法論においても課題があるといえる。反抗の程度から親子関係や自己形成の指標との関連を検討することも必要であると考えられる。さらに、考察でも述べたとおり、第二反抗期を感情面から捉えるか、行動面から捉えるかによってその経験の有無の割合が異なってくるように、反抗期の捉え方が異なると先行研究との明確な比較ができない。従って、第二反抗期の捉え方をある程度統一した形での研究の積み重ねが必要であるといえる。

最後に、第二反抗期の捉え方と関連する測定方法上の課題について先行研究を参考に述べておく。ここではまず、中学生を対象にした2つの調査をとりあげる。中学生を対象にした深谷（2004）の調査では、親との関係が「うまくいっている」（とてもうまくいっている＋かなりう

まくいっている+ややうまくいっている)割合は、母親で87.4%、父親で77.7%となり、全体的に親との関係がうまくいっている中学生が多いことが報告されている。その結果について深谷(2004)は“親との関係が陰悪な第2次反抗期的な状況はなく、円満な現代の中学生の姿が浮かんでくる”と述べている。一方で小学4年生から中学3年生を対象にした天野(2001)では、「明確には、つい反抗したくなる」などの質問項目から測定された「対立・反抗」の得点は、統計的に有意な学年差がみられ、学年があがるにつれて増大することが明らかにされている。一見矛盾するような結果であるが、そこには反抗、反抗期などを直接的に扱うかの違いがあるものと考えられる。深谷(2004)の調査では、反抗期、反抗などの用語は使用されておらず、親子関係に関する調査結果から、第二反抗期がみられないという解釈がなされている。このことから、第二反抗期について検討を行う際、反抗期、あるいは反抗という用語を直接使用して回答を求める場合とそうでない場合では、被調査者が受ける印象が異なり、回答に影響される可能性があるといえそうである。反抗期という用語は多くの人知っている用語であり、個人によって概念やイメージは異なるものの、一般的に誰にでも起こるもの(千田, 2011)という認識がある可能性があり、その反抗期に関するステレオタイプのイメージが影響し、反抗期、あるいは反抗があったと回答する割合が増える可能性がある。特に、第二反抗期の時期を経験し、自分の過去をある程度客観的に振り返ることができる大学生を対象に回顧的な方法を用いて検討を行う場合には、その傾向は顕著になる可能性がある。この点について、詳細な検討を行っているわけではないので今後検討した上で議論する必要があるが、第二反抗期を直接扱った研究が少ない中、深谷(2004)のように親子関係に関する検討結果から第二反抗期の有無について言及されている場合も少なくない。反抗期あるいは反抗という用語を使用するかどうかは、第二反抗期の有無の解釈に大きな違いを生む可能性があることは、第二反抗期について検討する上で留意する必要があるかもしれない。改めて述べるが、第二反抗期に関する研究は、関心が高い割に実証的な研究が少ない。その要因は、多くの人知っているが故の第二反抗期の捉え方の困難さが影響している可能性がある。上記のような課題もふまえて今後第二反抗期についての実証的な研究が積み重ねて行われることが望まれる。

【付記】

本論文は、著者の指導のもと浜口美樹さん、松枝真穂さんが平成23年度に鹿児島県立短期大学に提出した卒業論文に、両氏の許諾をうけたうえで、著者がデータを追加したのち再分析、考察を行ったものである。本調査の実施に際しご協力いただいた諸先生方、調査に協力していただいた学生の皆様に御礼申し上げます。

【引用文献】

- 天野敏光 (2001). 思春期の親子関係, 教師-生徒関係における依存と抵抗 三重大学大学院教育学研究科修士論文 (未公開)
- 安藤史高 (2003). 自律性欲求とクリティカルシンキング志向性との関連 ころとことば, **2**, 51-59.
- 安藤史高 (2007). 保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響 一宮女子短期大学紀要, **46**, 71-78.
- 青野篤子 (1997). ジェンダーの観点からみた第二反抗期: 女子大生の調査を通して 心理科学, **19**, 1-8.
- 浅井継悟 (2012). 日本における過剰適応研究の研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **60**, 283-294.
- 新井邦二郎・佐藤 純 (2000). 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成 筑波大学心理学研究, **22**, 151-160.
- 千田恭平 (2011). 中学生の「反抗」の真実の姿—反抗と自立は等価か(神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書) 研究所報, **60**, 51-60.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle. International Universities Press.
- 藤田ミナ・岡本祐子 (2009). 青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 121-132.
- 深谷昌志 (監) (2004). 中学生にとっての家族—依存と自立の間で Vol.77 ベネッセ未来教育センター
- 平石賢二 (2011). 思春期の反抗がもつ意味—反抗する子としない子 児童心理, **65**(15), 81-86.
- 細田憲一 (2008). 反抗期のない子は問題か—反抗期の意味を考える 児童心理, **62**, 1471-1475.
- 伊藤美奈子 (2013). 「反抗期がない子」を考える 児童心理, **67**, 944-949.
- 黒崎英樹 (1995). 青年期後期における自己形成態度と自己決定態度の研究 甲南大学紀要文学編, **98**, 133-147.
- 溝上慎一 (2011). 反抗期のない大学生 教育と医学, **59**, 438-445.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係: 「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, **59**, 462-473.
- 野田歩・葛西真記子 (2009). 青年にとっての第二反抗期と親子関係に関する調査—質問紙調査と面接調査を通して— 鳴門生徒指導研究, **19**, 54-66.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 大久保摩里子 (2009). 青年期の延長にみる親子関係の変化 人間文化研究, **12**, 27-36.
- 小沢一仁 (1999). 現代の子どもの反抗を考える 児童心理, **53**, 1633-1637.

- 桜井茂男 (2003). 子どもの動機づけスタイルと親からの自律性援助との関係 筑波大学発達臨床心理学研究, **15**, 25-30.
- 繁多 進 (1999). 反抗期 心理学辞典 有斐閣 pp703.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 白井利明 (1997). 青年心理学の観点からみた「第二反抗期」 心理科学, **19**, 9-24.
- 白井利明 (2003). 大人へのなりかた—青年心理学の視点から 新日本出版社
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 住田正樹 (1995). 反抗しなくなった子どもたち—よい子志向の文化 児童心理, **49**, 200-205.
- 田中 正 (1993). 親子関係と自我の確立：青年期後期の女子を対象として 名古屋文理短期大学紀要, **18**, 7-14.
- 渡邊恵子 (1994). 青年期の自立と親子関係 日本女子大学紀要人間社会学, **5**, 305-319.
- 渡邊恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, **18**, 23-31.